

## 次期学習指導要領を読む ④ 算数の入口と出口を問い直す

今回の基準改訂に当たって、中教審教育課程部会の算数・数学WGでは小学校から高等学校までの「算数・数学教育のイメージ」について時間をかけて審議しました。児童・生徒が12年間に及ぶ算数・数学教育を通して、どのような力を身に付けていくのかを整理し、一貫した指導の実現を目指そうとしました。その結果として、三つの柱の資質・能力を基盤にして、系統性を重視した算数・数学教育の目指す方向性が明らかにされました。

小学校の算数においては、中学校の数学との接続が特に重視され、教科目標はもちろんのこと、三つの柱の資質・能力でもその連続性が丁寧に整理されました。これまでの学習指導要領では算数と数学のつながりが十分とは言えず、小学校および中学校双方が互いを意識しながらの指導ができにくい状況がありました。本市の場合、横浜版学習指導要領で9年間の能力系統を示してきたものの、その元になる学習指導要領に連続性が描き出されていなかったため、実際の学習指導に一貫性を持たせることを難しくしてきたように感じていました。このような状況を改善していく上でも、「算数・数学教育のイメージ」が明確に示されたことは大きな意味があると言えるでしょう。

また、教育課程部会の「審議のまとめ」では、幼児教育と小学校教育の接続の在り方も大きく取り上げられました。幼児教育で目指そうとする子供の資質・能力が明確に示されるとともに、その延長線上にある小学校教育との関連がはっきりと整理されました。幼児期の生活や遊びを通じて、自分たちに関係の深い数量、長短、広さや速さ、図形の特徴などに関心をもち、必要感をもって数えたり、比べたり、組み合わせたりする経験やそれによって育成される資質・能力を、積極的に算数の学習に活かしていくことなどが示されています。

これらを踏まえて行われる今回の基準改訂では、改めて算数の「入口」～1年生の指導の在り方～と、「出口」～中学への接続を意識した高学年の指導の在り方～が問われていると言えるでしょう。これまでも小1プロブレムや中1ギャップなどを克服するために、スタートカリキュラムや小中接続といった取り組みによって「入口」と「出口」への関心をもってきてはいるものの、それらの多くはいかに滑らかに指導を連続させるか、子供のつまずきや不安を軽減させるための指導はどうあるべきかなどといった指導法中心の議論だったように思います。

しかし、今回の基準改訂で話題にしているのは、小学校と両者とを資質・能力ベースでいかにつないでいくかといった新たな視点です。就学前にどのような資質・能力を身に付けて算数の学びに向かおうとしているのか、小6と中1を一括りにしてそこで目指すべき資質・能力をどうとらえるのか、さらには小学校6年間での資質・能力の育成段階をいかにグレーディングしていくのかなど、新たな視点から算数の学びづくりを問い直していく必要があるように思っています。これまで小学校算数という枠で議論してきた実践研究を、K-12（幼稚園から高等学校まで）という枠に土俵を広げて見つめ直すことが求められているのかもしれない。

(2016/11/02)